

中央アジア地域研究希少資料デジタル化の試み

帯谷知可

OBIRA Chika

はじめに

ここ数年、中央アジアのウズベキスタンにおいて、中央アジア地域研究に有用であろうと思われる希少資料のデジタル化に関わってきた。これは、地域研究企画交流センター（以下、地域研）のバックアップを得たものではあるが、一方で、私とウズベキスタン側の協力者との個人的な信頼関係に多くを負った、なかば私的なプロジェクトともいえる、いまだ手探りの仕事である。最近になつてようやくそれが少しづつではあるが形を成してきたように思えるので、ここではその概要を紹介すると

もに、将来的な展開の可能性について述べてみたい。

私たちがターゲットとしているのは、現在でいえばウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、トルクメニスタンに相当する地域、すなわちかつて帝政ロシアとソ連の支配下にあつた中央アジア地域を対象とする、主にロシア帝政期のロシア語による希少資料である。といっても、そのような資料群は膨大なものであり、私たちのような小さな有志のグループに手が届くのは、そうした資料のなかで規模が大きすぎず、コレクションとしてある程度まとまっているようなもので、そのうち数セットしか存在しなかったり、資料そのものが失われる懸念があつたりするものである。

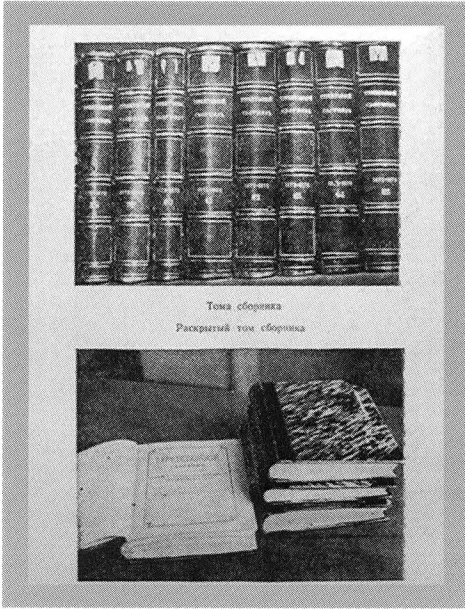
中央アジア研究にとつて現地の人々自身の言葉によつて書かれた史資料が最も重要であることはいうまでもなく、日本ではこれまでに東洋文庫、^①「現代イスラーム世界の動態的研究—イスラーム世界理解のための情報システムの構築と情報の蓄積」^②（通称イスラーム地域研究、一九九七〜二〇〇一年度、東京大学）の第一班（東京大学大学院人文社会系研究科）、第三班（地域研）および第六班（東洋文庫）、京都外国語大学の堀川徹教授を中心とするグループによる共同研究、東京外国語大学の二一世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」^④の一部などによつて、中央アジアやロシアに所蔵されている現地語一次資料の収集やマイクロ化、デジタル化、共同研究などが行われてきた。一方で、中央アジアの近現代史研究資料として為政者側の資料、すなわちロシア語による資料が重要であることも事実であり、双方をつき合わせることによつて近現代中央アジア研究は成り立つ。したがつて、私たちの試みは、日本で行われている中央アジア史および中央アジア地域研究の資料に関するいくつかの先行プロジェクトの、いわば隙間をうめていくことになるだろう。なお、ソ連期のロシア語の資料についてはあまりにも量が膨大であることと、中央アジアやロシアの文書館などにおいて比較的よく整理・保存され、ロシア所在の文書館資料の一部はマイクロ化・市販されて

いることから、私たちの対象からは基本的にははずしている。

一 『トルキスタン集成』 デジタル化の経験とその後

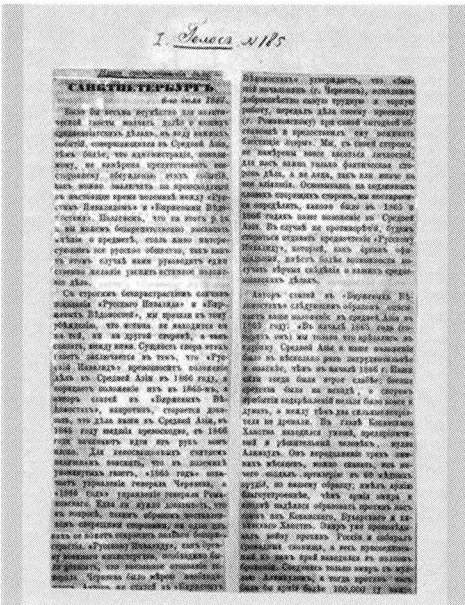
そもそもデジタル技術などにはまったく疎い私がこうしたことに興味をもつたのは、一九九九年に在外研究でウズベキスタンに滞在中、『トルキスタン集成』(*Turkes-kazskii sbornik*) という資料コレクションをまのあたりにしたことが発端である。ここでは紙幅も限られているので、コレクションについての詳細は (Kasimova 1985) および (帯谷 2002a: 2002b) などをご参照いただきたいが、ともかく、タシケントのウズベキスタン国立図書館 (Alisher Navoiy nomidagi O'zbekiston Davlat kutubxonasi) 希少本室で帝政ロシアの初代トルキスタン総督 K・P・カウフマンの命によつて収集が開始された、ロシア人のための中央アジア百科『トルキスタン集成』五九一巻を前にして、大感激すると同時に、一〇〇年以上も前のこの貴重なコレクションが置かれている現状にひどく胸が痛んだことが、このコレクションの複製を作る必要性を現地で学術出版や広告業に携わる出版社を経営している友人らに訴えるきっかけとなった。

図1 ウズベキスタン国立図書館所蔵『トルキスタン集成』



(Kasimova 1984) より。

図2 『トルキスタン集成』の最初の所収記事

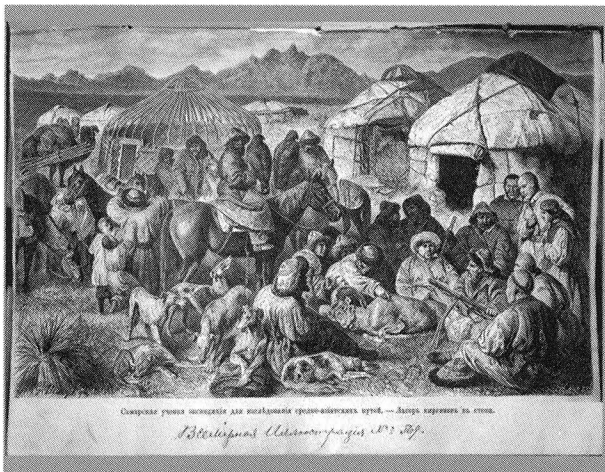


ロシアの新聞『ゴロス（声）』1867年7月6日掲載の記事「我々の中央アジア問題：サントペテルブルグ」の冒頭部分。CD-ROMではこの形で一つの画像となっている。

上述の拙稿で言及していなかったことに若干触れておくと、その後この出版社メディア・ランドは未経験のことにとまどいながらも私の考えに全面的に賛同し積極的に協力してくれた。まずは国立図書館との交渉に約半年を費やすことになった。この間、著作権などの問題もあるため、メディア・ランド社において弁護士にも相談しながら、どのような形で複製の作成が可能なのかを検討され、やがて両者の間で合意ができ、協力関係が構築された。

技術的な面では、資料そのものをスキャナーにかけるには、資料自体の経年劣化が著しいため上からスキャンするしかなく、またその程度画像に精度が期待できるかも未知数であった。そのため当初マイクロ・フィルムでの複製撮影や、白黒ネガで撮影しフィルムをスキャンする方法を想定したが、これは現地の事情に照らすと、フィルムや現像のための薬品など消耗品の購入に膨大な費用がかかり、そもそもそうしたフィルムや薬品はウズベキスタンでは入手不可能なため、ほとんど現実性がないことがわかった。また、マイクロ資料を読むためのマイクロ・リーダーの調達にも現地ではほとんど展望がないという事情もあった。結局、この間のデジタル技術の著

図3 『トルキスタン集成』第287巻所収のイラスト



「中央アジア・ルート探査サマラ学術調査隊：ステップのキルギズ人宿営地」。オリジナルはロシアの雑誌『フセミールナヤ・イリュストラーツィヤ（イラストで見る全世界）』569号掲載。

しい進歩とあいまって、「コンピュータのモニター上で文字が読めること」を前提に、デジタル・カメラで複写撮影するのが最も効率的との結論に至った。「文字が読める」ためにはjpgで十分であり、これなら容量もとらない。後に撮影作業の過程で明らかになったことだが、高性能一眼レフ・デジタル・カメラは、一日に数千枚を撮影するような作業を続けるとシャッターに故障

を生じがちだが、地図など精度の必要な撮影には威力を発揮する。大量撮影には、むしろ一眼レフとコンパクト・カメラの中間に位置するようなタイプの五〇〇〜八〇〇万画素程度のデジタル・カメラが適している。撮影された画像はコンピュータ上で見やすいように若干加工され、資料のオリジナルの巻ごとにフォルダを作成し各画像にオリジナルのページ番号をファイル名としてつける形で保存・蓄積された。こうしたノウハウはまったくのゼロからスタートし、メディア・ランド社においてカメラマンとコンピュータ担当者らの試行錯誤の末に確立されたものである。

『トルキスタン集成』全体の撮影を完了するまでには約三年かかった。幸いにも、この試みは、現地から資料原本を収奪しない形でのユニークな資料収集の方法として地域研で認めてもらうことができ、地域研が行ってきた現地資料収集の枠組みにおいて完成品を購入し、『トルキスタン集成』CD・ROM版（CD・ROM一二五枚組）は地域研所蔵資料として国立民族学博物館（以下、民博）図書室に設置されることとなった。この点ではそもそも民博に現地資料収集（民博の場合には展示・研究のためのモノの収集が中心）というシステムがあったことがたいへん幸いであった。ちなみに、このCD・ROM版の著作権はウズベキスタン国立図書館とメディア

ア・ランド社に属している。

私自身、このCD-ROM版を実際に手に取って、例えばごく最近では、帝政ロシア支配下の中央アジアにおける現地人教育について貴重な手がかりを与えてくれる資料をいくつか見つけることができた。現在、このコレクションの総合的なデジタル・インデクスの作成やPDF化の是非を検討中である。

デジタル化のノウハウを確立したメディア・ランド社は自らこの事業を継続することに熱意をもち始め、むしろ彼らがイニシアティブをとり、私が時折助言をするような形で、国立図書館の所蔵になる資料や民間に存在する資料などがその後もCD-ROM化されてきた。そのうち、地域研が収集し、民博図書室で閲覧できるもの以下のようなものがある。

- 『トルキスタン集成(N. V. ドミトロフスキー版、S. A. イダロフ版、A. K. ゲインズ版)』(CD-ROM二枚)
- 『トルキスタン・アルバム』(CD-ROM一枚)
- 『一八一六年作成中央アジア地図』(CD-ROM五枚)
- マックス・ペンソン写真コレクション⁸⁾(CD-ROM七枚)

『ソヴィエト・ウズベキスタンの書籍(一九一七—一九二〇)』(CD-ROM一枚)

『ウズベク共和国の雑誌(一九一七—一九二〇)／ウズベク共和国の新聞(一九六七)』(CD-ROM一枚)

また、次のデジタル化の対象としては、帝政ロシア側の資料として『トルキスタン集成』と相互に補完する部分も大きいであろう、トルキスタン総督府の官報『トルキスタン通報』(Turkistanische ведомosti)が有力候補なのだが、今のところ新聞サイズのものには既存の機材によるこれまでの方法では撮影が難しいのが現状である。

二 ロシア人

二〇〇三年度に「中央アジア地域研究希少資料アーカイブの構築とその学術的・一般的有効利用に関する研究」という科学研究費補助金によるプロジェクト¹¹⁾(研究代表者帯合知可)が採用されたのをきっかけにロシアのサンクトペテルブルグに行き始めた。ウズベキスタンでの資料デジタル化がだんだん軌道にのってきたので、ぜひロシアをこれに接続させたかったのである。かつての帝都

サンクトペテルブルグに所蔵されている中央アジア地域研究関連資料はどのような状況に置かれているのか、どこに何があるのか、一部のコレクションを共同でデジタル化する可能性はないかなどについて、まずは写真などのビジュアル資料を足がかりに探ってみようというのがねらいである。東洋学研究所 (Sankt-Peterburgskii Central Institute of Oriental Studies)、『物質文化史研究所 (Institut istorii materialnoi kul'tury RAN)』、人類学・民族学博物館 (クンストカーメラ) (Музей антропологии и этнографии им. Петра Великого РАН [Kunstkamera])、ロシア地理学協会 (Russkoe geograficheskoe obshchestvo) などを訪問し、中央アジアに関連のあるロシア帝政期の写真コレクションについて尋ねてみたが、いずれにおいても例えば「中央アジア」をキーワードに写真コレクションの全貌を調べられるようなシステムはない。ソ連解体後多くの地域でそうであるように、これらの研究機関ではなかなか近代的な設備を望むのが難しいのが現状のようであり、資料のデジタル保存などの方策もごく一部で行われているだけである。また、機関同士の横の連絡も薄く、どこにどのようなコレクションがあるのかという情報は機関間で共有されてはいないし、資料の開かれた有効利用や共有化などという考えはほとんど検討されていないことがわかった。い

わば、ロシアとソ連がその帝國的な力をもって収集してきた資料は、あたかもソ連解体などなかったかのように、重厚な研究所や博物館の奥深くで眠っているのである。一方で資料の悪用や流出を懸念して著作権問題には非常に敏感であるとの印象も受けた。もつとも別の面から見れば、これは各機関で貴重な資料を長年にわたって守ってきた人々の誇りの反映でもあるのだけれど。もう一つの問題は、ソ連解体後、ロシアの研究者にとつても中央アジアは完全に「外国」となってしまう、中央アジアで調査を行ったり、資料を読み出かけたたりすることは容易なことではなくなってしまったのである。そしてまた中央アジアをあらためて研究する動機自体もソ連時代に比べれば薄まってしまった側面がある。

さて、これらのうち、クンストカーメラの中央アジア部門において具体的に話を進める可能性が出てきた。部門主任の説明によれば、中央アジア部門の部屋に保管されている民族誌写真資料のプリント(厚紙の台紙に張られたもの)のほかに、それぞれの写真資料に関する収集時の記録などを記した目録 (logs) があり、ネガは別にネガテークに保管されている。このほかにもかなり膨大な写真コレクションがフォンドに保管されている。目録、ネガテーク、フォンドへのアクセスは一部の研究員のみがもっている。それら全体の情報が見わたせるようなカ

タログなどは存在しないようであった。

メディア・ランド社のスタッフも合流した二〇〇四年度の調査では、中央アジア部門の部屋に保管されているプリントの一部、約六四〇〇枚に目を通すことができた。その上で、私たちは資料に関する情報と資料そのものの「共有化」に関心があること、決して資料を悪用したり流用したりするつもりはないこと、ネガもプリントも経年劣化するので保存の方策を考える必要があること、デジタル化しておけばどのような資料を所蔵しているかを外に向けてアピールすることも可能になることなどを繰り返し説明した。結果的には、この約六四〇〇枚のうち、帝政期およびソ連初期の四つのコレクション約二千六〇〇枚をプリントからデジタル複写撮影し、クンストカメラから各コレクションについての解説などを提供してもらい、メディア・ランド社において画像と文章を加工、CD・ROM化することに同意してもらった。クンストカメラとメディア・ランド社の間で、クンストカメラ側の弁護士が入って文面を作成した契約が結ばれた（私が個人の資格でこのような契約を結ぶことはできなかったためである）。この場合、CD・ROMの著作権はクンストカメラにあり、完成したCD・ROMはクンストカメラとメディア・ランド社に一セット（四枚）ずつ置かれると契約上は明記された。そし

て同時に、プロジェクトの発案者として私からクンストカメラ館長あてに申請書を提出し、私の科研プロジェクトに（すなわち後には民博の図書室に入ることになるが）一セットを提供してもらうという手続きを踏んだ。このCD・ROMはあくまで閲覧・検索用、いわばデジタル・カタログであって、実際に写真を出版物に掲載したい場合などは個別にクンストカメラの許可を得、印刷に適した精度の画像をあらためて提供してもらわなければならない。

実は正直なところ、最も秀逸なコレクションはまだ見せてもらっていないという気がしているのだが、ともかくこれは第一歩であり、そうしたコレクションを見せてもらえるかどうかは今後信頼関係を強化できるかどうかにかかっていると思っている。幸いなことにクンストカメラの中央アジア部門ではこうした仕事にたいへん関心を示してくれており、クンストカメラ所蔵の他のコレクションのデジタル化の可能性だけでなく、場合によっては彼らを通じてクンストカメラ以外の機関にそのネットワークを広げられる可能性もなきにしもあらずという感触を得た。

三 今後の展開の可能性——「電子トルキスタニカ」構想

以上に見てきたように、このやや茫漠とした資料デジタル化の試みはメディア・ランド社を中心にして動き出しつつある。メディア・ランド社では独自にウズベキスタンの国立図書館以外の機関やカザフスタンの研究機関・研究者らともコンタクトし始めており、そのネットワークは中央アジア内においても徐々に広がっていく可能性がある。こうしたなかで、中央アジアやロシアの研究者、あるいは私も含めた日本の研究者がメディア・ランド社とデジタル化すべき、あるいは現実的にその可能性のある資料について協議し共に所蔵先と交渉する、資料の所蔵先にはデジタル化の許可のみを求め経済的な負担はかけない、デジタル化自体はメディア・ランド社において行い、メディア・ランド社にそうした資料がデジタル・データとして蓄積されていく、デジタル化した資料を必ず所蔵先に還元する、著作権の問題は所蔵先との交渉次第でケース・バイ・ケース、という方向性が見えてきたように思う。ただし、メディア・ランド社にとってはこの試みはまったくボランティアなもので、経済状況が閉塞的なウズベキスタンにあって確実な資金の裏づ

けがあるわけではなく、有志だけによって支えられている。私の側からは、地域研の現地資料収集の枠組みにおいて完成品のCD・ROMを収集したり、今回のロシアの例のように科研のプロジェクトで一部のCD・ROMを作成したりという形で、日本にもこれらの資料が共有され、かつ現地でのこの試みが途切れないよう、さまざまなサポートを続けていくわけである。

私たちの間では、この試みを「電子トルキスタニカ (Elektronama, Turkstanika)」と名づけ、いずれは様々な資料の所蔵先とメディア・ランド社と日本をつなぐネットワークを形成し、相互の資料交換をCD・ROMの形で行えるようなシステムをつくり、また中央アジアのどこかに研究者らが蓄積されたCD・ROM版資料を自由に閲覧できるようなスペースの設置を考えてはどうかという方向に夢(だけ)は膨らんでいる。これを、例えばメディア・ランド社の非営利部門としてNPOのような形で制度化するというような選択肢もあろうが、それがよいのかどうか、ウズベキスタンにおける全般的な学術界・出版界をめぐる状況や、ロシア語で書かれたものに対する政治的・社会的関心のあり方などを考えると、現時点では正直なところ判断に迷う。また、あまり拙速に手を広げすぎると、末端でのコントロールが失われて私たちの意志に反して資料の悪用や流用が防げ

なくなること心配である。一方で、メディア・ランド社の主要スタッフのいづれか、あるいは私が欠ければ、この試みは頓挫してしまう可能性も大きく、せっかくこれまで蓄積してきたものが有効利用に付されなくなってしまうかもしれないという懸念もある。したがって、少なくともこの試みが細々とではあっても自律的に動いていくようなしくみを今後考えていく必要はあるだろう。

また、日本で盛んになりつつある著作権（とりわけデジタル著作権）などに関する議論にキャッチアップし、必要があればそれを「電子トルキスタニカ」に反映させていく努力もしなければならぬだろう。この点では私自身のことならぬ現状を反省している。

おわりに

日本の中央アジア研究者の一人という立場に立ち戻ってみると、このような形で収集したデジタル資料に関する情報を有効に発信すること、さらに収集した資料を用いた研究を実際に展開することが次の課題であると考えている。前者については、収集した資料は民博図書室に置かれているので、もちろんその目録検索（OPAC）や国立情報学研究所の総合目録データベース（NACS

IS-Website）でヒットするのだが、それは書誌情報やキーワードがわかっている場合であって、その前提としてまず収集した資料に関する情報を一括して提示しておく場が必要である。これも、なかば私の怠慢だが、HP上などで別途、中央アジア関連のデジタル資料の一覧を掲載し、各資料の概要紹介を行わなければならないだろう。後者については、『トルキスタン集成』のデジタル・インデクス作成のめどがついた段階で、このコレクションを利用した共同研究会を立ち上げてはどうかと今のところ考えている。

さらに、全日本規模の、あるいは国際的な資料の共有化、ネットワークの構築という、もう少し大きな枠組みで考えると、私たちのこのささやかな試みをいづれかの時点で先行する大型のプロジェクトなどに接合・リンクさせていくことを検討してもよいかもしいない。日本あるいは国際的なネットワークの一部と位置づけられることによって、ある程度基盤が安定すれば、ウズベキスタンの諸々の状況にあまり左右されずに活動が続けられるのではないかと思うからである。その点では、東京外国語大学の「史資料ハブ地域文化研究拠点」がすでに大きな成果をあげつつあり、また二〇〇四年四月に発足した地域研究コンソーシアムの枠組みでも情報資源共有化研究会や地域情報学研究会などが立ち上がり活動が本格化

しようとしていることは心強い限りである。今後それらの場でのような議論が展開されるのかに注意を向けながら、「電子トルキスタニカ」の今後の方向性を探っていききたい。カメラと三脚をかついで図書館や研究所を行脚する「電子トルキスタニカ」の有志たちとの仕事はおそらく私のライフ・ワークにもなるのではないかと思っ
ている。

註

- (1) 東洋文庫のHPでは中央アジア諸語文献を含む所蔵圖書のオンライン検索や『中央アジア研究文献目録』データベースを見ることができ、<http://www.toyo-bunko.or.jp/> (二〇〇四年二月二四日)
- (2) HDは<http://www.lu-tokyo.ac.jp/IAS/Japanese/index.html> (二〇〇四年二月二四日)
- (3) 民間から発見された史料を堀川教授がウズベキスタンの東洋学研究所に寄贈したことからスタートし、東洋学研究所との共同研究、さらにはウズベキスタン国内の他の研究所や博物館、民間に存在する古文書史料の整理・研究・デジタル化・カタログ化などが若手研究者の参加のもと一〇年以上にわたり、継続されている。これら一連の古文書研究プロジェクトについては磯貝(2002)、堀川(1993; 2002)、Urubaev et al. (2002)を参照。
- (4) 詳しくは本小特集の藤井論文を参照のこと。史資料へのHPは<http://www.tufs.ac.jp/2icoe/area/index.html> (二〇〇四年二月二四日)

(5) *Turkestanskiĭ sbornik : sbornik materialov o russkom Turkestane i stranakh Srednei Azii* (sost. N. V. Dmitrovskii, S. A. Idarov, A. K. Gims). これは先のCD-ROM一二五枚から成るメジヨフ編の『トルキスタン集成』とは別の同名コレクションである。ドミトロフスキー、イダロフ、ゲイムス各自がそれぞれこの名称で自分のための文献コレクションを作成していたもの。オリジナルはウズベキスタン国立図書館所蔵。

(6) *Turkestanskiĭ al'bum. A. L. Kun i M. I. Brodovskii* (sost.) 初代トルキスタン総督カウフマンの命により作成されたロシア領中央アジアに関する写真アルバム。一〜四巻は歴史、五〜七巻は考古学、八〜九巻は民族誌、一〇巻は産業をテーマとする。オリジナルのアルバムは多数各地に存在するが、このCD-ROMはウズベキスタン国立図書館所蔵のコレクションから作成されたもの。

(7) *Karta chasti Srednei Azii, soderzhashchuiu zemli kirgiz-kaisarov, korakapakov, turkmensev i bukhartsen, sochinena v 1816 g.* 民間の個人コレクションからデジタル化された古地図。

(8) *Max Penson's photos from Media Land album (CD-ROM一枚)* ; *Max Penson's photos selected for his exhibition in Switzerland (CD-ROM一枚)* ; *Photos from Max Penson's archives (CD-ROM五枚)*. マックス・ペンソンのMaks Penson (1893-1959) はソヴィエト時代初期にウズベキスタンの『プラウダ・ヴォストロカ *Pravda Vostoĭka*』紙で活躍した写真家。その娘がタシュケントで保管するペンソンの写真アーカイブの一部などをデジタル化したもの。

(9) ソ連時代の書誌。オリジナルはウズベキスタン図書館

所蔵。

(10) ソ連時代の雑誌・新聞書誌。オリジナルはウズベキスタン図書館所蔵。「ソヴィエト・ウズベキスタンの書籍」の最終部分とともに一枚のCD-ROMを成す。

(11) 成果として資料CD-ROM六点を作成した。詳しくは成果報告書(帯谷 2005)を参照されたい。
(12) H P は <http://www.jcas.jp>

参考文献

磯貝健一 (2002) 「中央アジア古文書学における書式研究の可能性——合法売買文書によるケース・スタディ」新泉館編『中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究』(平成一一) 平成一三年度科学研究費補助金・基盤研究A (二) 研究成果報告書、中央大学、五一―六六頁。
帯谷知可 (2002a) 「*Turkestanski sbornik* について」新泉館編『中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究』(平成一一) 平成一三年度科学研究費補助金・基盤研究A (二) 研究成果報告書、中央大学、六七―八八頁。

—— (2002b) 「ある稀少資料のデジタル化の試み——*Turkestanski sbornik* の保存と有効利用に向けて」イスラーム地域研究第三班H P http://www.minpaku.ac.jp/hdocs2/jcas/islam_studies/reports5.html (二〇〇四年一月二四―四四)。

—— (2005) 『中央アジア地域研究稀少資料アーカイヴの構築とその学術的一般的利用に関する研究』(平成一五) 平成一六年度科学研究費補助金・基盤研究B (二) 研究成果報告書、国立民族学博物館。

堀川徹 (1993) 「ヒヴァ・ハーン国古文書の『発見』『窓』八

四号、二一五頁。

—— (2002) 「ヒヴァ・ハーン国時代のカーディー文書研究」『三島海雲記念財団研究報告書(平成一三年度)』第三九号、一〇九―一二頁。

Kasimova, A. (1985) *Turkestanski sbornik*. Tashkent: Uzbekistan.

Urunbaev, A., Khorikava, T., Faiziev, T., Djuraeva, G., Isogai, K. (2001) *Katalog khivinskikh kharizskikh dokumntov XIX-nachala XX vv.*, Tashkent-Kioto: Institut vostokovedeniia AN Ruz / Kiotskii universitet po izucheniu zarubezhnykh stran.

(おびやちか/地域研究企画交流センター)